

# 日本と中国

## ⑩ 中越の南シナ海紛争

南シナ海（西沙諸島海域）の資源領有権を巡る中国とベトナムの紛争が一気にスパークした。大きさで勝る中国船がベトナム船に体当たりする様子がTVで繰り返し放映されて、ベトナム人の反中感情に一気に火が付いた。

街頭から始まった反中デモは、ベトナム政府の「黙認」姿勢を感じ取るや、一気にエスカレート、暴徒は「漢字」を目印に工場を襲い、中国大陸系、台湾系、またはシンガポール系の外資企業の工場が略奪や放火に遭い、中国人従業員に死者、多数の負傷者まで出たという。

現場海域で中国公船に圧されていたベトナムは、国際メディア戦では「中国の横暴」をアピールして優位に立っていたが、想定外の騒擾（そうじょう）と人身被害が発生するや、一挙に立場を悪くしてしまった。

さらに、暴徒が大陸系企業以外の外資企業にまで手をかけたせいで、ベトナムに工場を進出させている台湾、韓国、日本企業にも当地の治安・投資環境への不安を呼び起こしてしまった。政府は慌てて騒擾取り締まりの姿勢に転じたが、評判低下の後遺症はしばらく消えないだろう。

さて、中国の反応である。

騒ぎの跳ね返りを恐れて中国当局が報道規制を敷いたせいだろう、中国国内の報道は甚だ低調だったが、ネットで情報を知った「愛

国」的な中国人は、さぞかし憤激しているだろうと思いきや、情報に対する反応の方も低調だったのだ。

憶測だが、その原因として二つのことが頭に浮かぶ。

まず、ベトナムの騒擾が2年前の

## 騒擾劇は中国自画像の再演

尖閣「国有化」騒動に酷似していたことだ。国際問題専門紙「環球時報」は「ベトナム暴徒は東アジア投資秩序の公敵だ」と題する5月15日付け社説の中で「中国でも日本との紛争のとき大規模な抗議行動が爆発し、沿道での打ち毀しが起きてしまったことがあるが…」と2年前の騒ぎに言及した上で、ベトナムの態度は当時の中国の「迅速な事態収拾、反省の態度に劣ると、何とも微妙な非難の仕方をした。ネットには「釣魚島の時（＝尖閣「国有化」騒動）と瓜二つじゃないか」という書き込みがあった。中国人はまるで「鏡で己の姿を見せられている」気持ちだったので

はないか。二点目は、紛争の相手が、日本のようになって中国を虐めた（往年の）「列強」ではなく、中小国ベトナムだったことだ。

私はちょうど「中国の歴史認識はどう作られたのか」（汪錚著、伊東真訳 東洋

経済新報社5月刊）という新刊書を読んでいたところだった。著者は中国生まれ、在米の国際政治学者である。

この本は、19世紀前半から150年に及ぶ「国恥」の日々の「記憶」がどのように「選び取られ」、また、「愛国主義教育」等によって加工されてきたかを振り返りながら、この「集団的記憶」が中国人のアイデンティティ形成に、そして中国の対外政策決定に大きな影響を与えてきたことを学術的に分析している。かねて自己流で中国の「歴史トラウマ」を指摘してきた私にとっては、まさに「我が意を得たり」の本である。

著者は「（日本を含む）列強によって、中国が如何に虐げられてきたか」こそが、この「集団的記憶」を貫く「大きな物語（マスター・ナラティブ）」だと指摘するのだが、そこでルサンチマン（被害者意識）の名宛て人とされるのは、欧米列強、そして日本である。

こんなに中国が直面する国際的な紛争・摩擦の相手方がこの名宛て人と重なった途端、激烈な抗議行動を誘発する心理のスイッチが入るのだが、中国が虐げられた記憶を持たない相手だったり、「格下」の中小国だったりすると、スイッチが入らないようなのである。

「熱く」なることなしに、2年前の自画像を見せられた中国人は、改めて何某かの教訓を反芻しただろう。一部の煽動者のせいで、優位に立っていた「国際宣伝戦」を台無しにしてしまったベトナム人もまた、唇を噛む思いで事件を振り返っているだろう。

激情に任せて行動すると「敗者」になる――我々も他山の石としよう。

（津上工作室 代表・津上俊哉）